生き抜いた父 絵本に

「想像絶する」葛藤越え

伝言 しずおか戦後80年 ■9

第1章 シベリア抑留 ③

遺族と高校生

シベリア抑留の日本人収容所は、モンゴルや中央アジアも含めて千から2千カ所ほどあったとされる。旧ソ連は統制に音楽や芸術活動を一部許可し、日本人による劇団や楽団が各所に発足した。極東のコムソモリスク第二収容所にいた窪田一郎さん＝静岡市葵区、故人＝は1946年末、バイオリンを自作して楽団と劇団を立ち上げた。普段は木材伐採などの重労働に従事し、週末になると収容所を慰問し、上演に励んだ。

帰国の未来が見えなかった収容者にとって音楽は大きな励みだった。演劇で日本の町並みを描いた背景画に声を上げて泣き、女性に扮（ふん）した団員が登場すると会場が割れんばかりの大声で笑った。同収容所にいた松本茂雄さん＝神奈川県、故人＝は窪田さんらの上演を見ていた1人。「ただうれしくてうれしくて、懐かしさに胸が締め付けられた」と2018年に静岡市内を訪ねた際に振り返った。

本を眺める多田つむぎさん（前列右）、窪田由佳子さん（同左）と制作を手伝った生徒たち＝2024年11月末、静岡市清水区の清水南高

ふと、一郎は思いつきました。
〈そうだ、自分でバイオリンを作ろう！〉
バイオリンの胴体は、松の木と白椿の木で作ることにしました。これは、ふろ当番にたのんで、太い木を取っておいてもらうことができました。
バイオリン作りには道具がいります。その材料は、作業に出かけた先で拾い集めました。のこぎりの刃の折れたもの、細い側線、松脂などが役に立ちます。
作る場所は、人目につかない作業小屋を選びました。機材が置いてある小屋で、カギがかけられることもなく、夜にはだれも来ません。
一郎は、ランプを持って作業小屋に入ると、ポケットに忍ばせてあった、のこぎりの刃の折れたものを取り出しました。それに柄をつけて、木を削る道具にするのです。
丸太の切れはしを椅子にして、小屋の片隅にうずくまり、せっせと木を削りました。
週に一度は持ち物検査があって、道具が見つかると取り上げられてしまいますが、一郎は何度でも作り直しました。
図面も解説書もないけれど、子どものときに、バイオリンの本を読みながら自分で作った経験が、おおいに役に立ちました。そして、お父さんにバイオリンを買ってもらったときに、うれしくて毎晩ふとんの中で抱きかかえて寝たこと。大きさや組織の形は、そのときの記憶がたよりでした。

絵本「シベリアのバイオリン」で多田つむぎさんが描いた挿絵。後ろ姿の窪田一郎さんがバイオリンを作っている（地湧社提供）

窪田さんは幼少期からバイオリンに憧れて構造を調べるなどし、親に頼み込んで買ってもらったが、戦中は敵性音楽として嫌われた。自由を求めて旧満州（中国東北部）に渡ったが、まもなく召集された。収容所での演奏活動は窪田さんが初めて、バイオリンが人々に熱狂的に支持される手応えを得た日々だった。

◇

窪田さんは帰国後家庭をもうけ、1981年、55歳で亡くなった。長女の由佳子さん(69)は足跡を追い、2020年に小説を発表した。24年12月には自身の母校の清水南高3年の多田つむぎさん(18)に挿絵を依頼して、小説を基にした絵本を出版した。祖父母が戦後世代という子が増え続ける中「80年前、57万人もの日本人がシベリアで苛烈な収容生活を強いられたこと、それでも希望を探し、生き抜こうとしたことを、絵本なら子どもに直接伝えられる。高校生と作ることは悲願だった」と話す。

◇

絵本のお披露目の日、多田さんはほっとした表情でページをめくり「具体的なイメージを持てないつらさに直面し続けた」と吐露した。収容者が見た地獄のような光景を「想像しきれないし、簡単にしていいはずがない」と葛藤した。制作が止まるほど悩み、考え抜いて「今を生きる私たちには本当のことが分からないのだと、あえて伝えよう」と決めた。挿絵はいずれも影絵で、俯瞰（ふかん）した視点を取る。バイオリンを作る一郎さんは後ろ姿で表情は見えない。森林伐採する人々の姿も作り込まず、木を大きく描いて労苦を表現した。「登場人物の気持ちの考察を、読み手に任せたい。より濃く、考えてもらえたら」と願いを込める。

＜メモ＞窪田由佳子さんが2024年12月に書き上げた絵本「あなたに贈る物語―シベリアのバイオリン」（地湧社）は、20年に出版した小説「シベリアのバイオリン」の文面を簡略化し、小学生から無理なく読めるようルビを振るなどした。由佳子さんは音楽家で、演奏を交えた講演でシベリア抑留を語り継ぐ活動を続ける。市民団体「シベリア抑留者支援・記録センター」のシベリア抑留記録・文化賞の企画奨励賞を受賞した。

静岡新聞

© 静岡新聞社　無断複製転載を禁じます